

(公社) 熊本県建築士会 女性部会 ～かわら版～

第26号 令和4年7月発行

◆住まいづくりの無料相談会が

リニューアルしました◆

令和4年4月より毎月第4土曜日の無料相談会は
建築士会館（県庁南側道向かい）7階に場所を移して
開催しています。お気軽にお越しください。

コロナ感染予防の観点から事前予約をお勧めいたします。

※連絡先 熊本県建築士会 Tel096-383-3200

✉leb03540@nifty.com

※開催場所： 熊本市東区神水1-3-7 7階



ありがとうございました。

4月担当相談員：山下恵子さん、盛高麻衣子さん

5月担当相談員：松永直美さん、小笹博美さん

6月担当相談員：井芹里恵さん、谷口規子さん

※裏面には「熊本地震の記録」が掲載されています。前回に引き続き阿蘇支部の光原さんに執筆頂いています。4月で発生から丸6年が経過しました。徐々に私たちの中で過去のこととなりつつある日常の中で、もう一度あの時を思い起すきっかけにきっとなります。

残念ですが光原さんの「震災直後編」は最終回となります。是非目を通してみてください。

【報告】令和4年度熊本県建築士会 女性部会の総会を開催しました

去る6月29日、総会を開催しました。コロナ禍のため久しぶりに顔合わせたメンバーも多く、また新しく初めて顔合わせた方もおられ、気持ち新たに今年こそは活動がんばろうと意識を合わせたところです😊

今年の主な活動予定↓↓

- 住まいづくりの無料相談会
- 全国女性建築士連絡協議会、建築士の集い等への参加
- セミナー・講習会の開催(茶話会も併催)

熊本県建築士女性部会は、楽しく横の繋がりを大切にしながら建築士として学びの多い場です。
あなたも参加してみませんか。



わたしたちは「いつでも、誰でも、気軽に」をモットーに全員が参加できる部会活動を目指しています。女性部会の最新情報はFacebookで随時更新中！

「熊本県建築士会女性部会」で検索 ♪ 📱 📱 📱



2016年4月の熊本地震、6月の豪雨災害。その時阿蘇では何が起きていたのか。
どのように感じ行動したのか。最終回 「サイドストーリー」です。



阿蘇支部事務局
采建築設計室
代表 光原摂子

最終回 サイドストーリー

冬の訪れの早い阿蘇では5月初旬に田植えが行われる。地震のころはハウスで苗を育てている頃だった。地震とともに起こった停電・断水に米農家は窮地に立たされていた。苗を育てるための水が無い。当時世話役をしていた本田さん（仮名）は、山の水源から水をタンクに汲んでくることを考えた。ところが、水源の上部の山肌は木も草もなく岩が露見するほどに崩れていた。当然、水源に続く道は封鎖されており、道路には立ち入り禁止のバリケードと消防団が24時間体制で見張りをしていた。本田さんは水を汲みに行きたいと交渉する。が、震度3レベルの余震が続く中、消防団は通ることを許さなかった。農業委員会・市役所・・・どこにかけあっても答えは「あきらめろ」だった。せっかく育てた苗は元気がなくなっている。“今年の収入はゼロ”かもしれない、私だけじゃなく周りの農家も。本田さんは意を決して、何度となく足を運んだバリケードに向かう。「俺は死んだっちゃんいい、通してくれんだろうか」「水が無いと収入がなくなって、米農家が何軒も潰れることになる。」「それだけは命に代えて避けなくてはならん。」消防団のメンバーは何も言わず、動きもしなかった。それは、本田さんが大きな水のタンクを積んだ軽トラを立ち入り禁止区域に乗り入れても、だった。許しはしないが、何もないことにしたのだ。

苗は息を吹き返し、いざ田植えとなったころ、次の問題が出てきた。水路の堰を開

けても水がこない、更に水が来た田んぼに水を張ってもたまらないのだ。地震によって、水路が壊れていた。小嵐山（一の宮町）から水を引いている農家は交代で水路の補修に当たった。水が貯まらない田んぼは断層だった。そんな田はあきらめて、断層のない田を急いで準備して、2016年の田植えは終了する。

同じ頃、地震の片付けが落ち着き、心のケアを主とした災害ボランティアの方々が阿蘇に来られるようになる。私は子供と高齢者の支援を行っていたので、イベントの計画の話が次々と舞い込んだ。

子供は休校休園が続き、大人は仕事で手一杯、楽しみが何もなかった。そこで、「こどもの日」のイベントを企画した。手作りのゲーム・ビー玉を埋めて宝探し・折り紙でこいのぼりとカーネーションを作った。メインは、災害ボランティアのバーベキュー。通りがかりの方も参加して、その日は地震のことも忘れてはしゃぐことができた。

高齢者の方は、不安な日々が続いていたために、笑顔が見られないと施設職員の方から話が合った。そこで、大分県と福岡県からゴスペルグループに慰問をお願いした。初めは座っているだけの高齢者の方々だったが、手拍子やリズムに合わせて足を動かされるようになり、次に鼻歌が混じり、終わるころにはあふれんばかりの笑顔になった。私も音楽の力に鳥肌が立ち、感動の涙を止められなかった。ゴスペルグループの方は大観峰から阿蘇に来られる途中、山頂で視界が開けた瞬間、田植えを終えたパッチワークのような水田がキラキラ輝いた阿蘇谷を目にしたそうだ。その時、「阿蘇は大丈夫」と思ったと、話して下さった。その年は豊作だったと記憶している。（震災直後編・完）